



ブランド米「風さやか」粘りが良くモチモチとして程よい柔らかさが特徴 (P26にプレゼントあり)

安曇野市の誕生に歩調合わせ 若手の稲作農家がタッグ組む

安曇野市はそもそも豊科町、穂高町、明科町、堀金村、三郷村の5町村が合併して2005年に発足した新しい自治体。時を同じくして発足メンバーの1人、斉藤岳雄さんはある思いを強めていました。「耕作放棄地の解消などを考えると後継者の新規就農が重要なのに、米、麦などの土地利用型は入りづらい状況だし、農家もそれぞれ一匹狼のように個々でやっている。町村も合併して1つになったことだし、まずは集まってみよう」。当初は情報交換やレクリエーションのためのグループとしてスタートしました。

初期メンバーは5人。その中の1人、細田直穂さんは「同世代のコメ農家仲間が少なかったため、交流できる貴重な場でした」。浅川拓郎さんも「誘ってもらって同じ志を持つ農家の方と出会えたし、経営相談をしてもらったりもして助かりました」と当時を振り返ってくれました。

そのうち同志が増えていきます。青柳聡さんが「いろんなメンバーから

巻頭特集

「安曇野.come」



その名にコメたコメへの情熱

決して誤字ではありません。読み方は「あづみのどっとこめ」。地元の米農家が立ち上げた有志のグループです。市町村合併に伴う「安曇野市」の誕生がきっかけとなり、現在は市内8人のメンバーがさまざまな取り組みをしています。根底にあるのは「よりよい米作りをしながら安曇野を盛り上げよう!」という思い。今回はそんな皆さんの活動にスポットを当てたいと思います。

話聞いて仕事へのモチベーションに繋がっているし、すごく刺激を受けています」と話す、加わって1年になる寺島宗一さんも「近くに米農家の知り合いがいなくて悩んでいる時に声をかけてもらったんですが、皆さん経営者として意識が高いので勉強になっていきます」と同調。月に1回の定例会で栽培の技術や各種制度を学んだりして、それぞれが「より良い米作り」に力を注げるような集いになっています。降旗治喜さんは今年の全国農業青年クラブ連絡協議会のプロジェクト発表会(土地利用型作物部門)で、3位に当たる「会長賞」に輝きました。

お米で安曇野の魅力アップ! 新品種「風さやか」を発信へ



Good!

こうして集まりがでけると、「つくるだけでは満足できない」という思いも膨らんでいきます。安田大樹さんは「土地利用型として生き残って米を作っていくためには、安曇野ブランドを打ち出していきたいという思いが生まれてきました。そんな思いを発端として形となったものの1つが、ブランド米「風さやか」です。県内で

いち早くこの地で試験的に栽培された新しい品種で、「栽培方法の明確な教科書がやっとできてきた段階です」と安田さん。市内の学校給食で月に一回ある「安曇野の日」で地元産食材として子どもたちに出されているほか、地元の飲食店に使ってもらえるよう働きかけている。メンバーの1人、宮澤和芳さんの繋がりで大雪渓酒造とタッグを組み、日本酒にもなりました。現在は市や地元JAなどと連携して「風さやか広め隊」を結成。取り組みの裾野は広がり、じわじわと成果になって表れています。

活動が広がるにつれて「団体名が必要だ」ということになり、話し合っで名付けたのが「安曇野.come」。古来より日本人の主食である「米」であり、英語で「来る」を意味するcomeであり、お米を通じて安曇野が「どっと混め」という思いが込められています。のぼり旗のほか、共通の作業着もつくって市内外のイベントに参加するなど活動をPR。そして今度はロゴマークの作成に取り掛かっており、デザイン案を絞り込んでいる最中です。「農業で安曇野市をもっと面白く楽しく美しく美味しくしていくイメージ」(安田さん)「安曇野の自然や水、山などが想起できる爽やかなイメージ」(斉藤さん)など、それぞれの思いを盛り込んだものになるとのこと。

大雪渓酒造協力のもと「風さやか」で作った日本酒。爽やかな風味で、ちょっと辛口 (P26にプレゼントあり)



発足した時の思いを話す斉藤岳雄さん



熱く語る初期メンバー細田直穂さん

